

那須野盆地の小売商圈

—那須商圈系と大田原リング—¹⁾

松井 勇

1. 結合度と結合率

旧稿²⁾では28の商品(表1)について個別的に小売商圈を論じたが、本稿では同じ資料により、すべての商品を取り入れて総合的に考察した。以下単に集落というのは調査集落の意味で、表題の那須商圈系はその内155を含み、アンケートの対象数は集落当り平均2.7戸となる。

たとえば大田原市宇田川の場合、ネックレスの購入地(供給地)は、5戸の調査対象の内、4戸は大田原、1戸は宇都宮であるから、4/5と1/5をもって、それぞれの供給地との結合度とした。この手法によると大田原から購入する品目は27、結合度の合計すなわち総結合度は23.0となる。以下本論で結合度というのは総結合度の意味である。集落ごとにすべての供給地の結合度を合計すると28で、商品の数と等しい(表2)。なお宇田川の場合、大田原の結合率は23/28=82%となる。

表1 商品と番号

| 番号 | 商 品 | 番号 | 商 品 |
|----|----------|----|-------------|
| 1 | たんす類 | 15 | 動力脱穀機 |
| 2 | ネックレス | 16 | テレビ |
| 3 | ネクタイ | 17 | 電球蛍光灯 |
| 4 | コート・オーバー | 18 | 食 肉 |
| 5 | 男子洋服(外) | 19 | 果 物 |
| 6 | 婦人子供服(外) | 20 | 紙・文房具 |
| 7 | 男子洋服(普) | 21 | びん詰・かん詰 |
| 8 | 婦人子供服(普) | 22 | 鮮 魚 |
| 9 | 化粧品 | 23 | オートバイ |
| 10 | 呉服服地 | 24 | 自転車 |
| 11 | 下着類 | 25 | 酒・塩・しょう油・味そ |
| 12 | 医薬品 | 26 | ジュース・コーラ |
| 13 | コンバイン | 27 | たばこ |
| 14 | トラクター | 28 | 乗用車 |

外：外出着

普：普段着

表2 宇田川の購入地別結合度

| 東京 | 宇都宮 | 大田原 | 西那須野 | 佐久山 | 宇田川 | 計 |
|-----|-----|------|------|------|-----|----|
| 0.2 | 0.4 | 23.0 | 0.45 | 0.25 | 3.7 | 28 |

2. 個別商圈と那須商圈系

大田原はそれ自身とこれを取り巻く46の集落の共通の購入地で、かつそのいずれに対しても、大田原以外の供給地と比べて結合度が最も大きい。これらの集落の分布領域を大田原の個別商圈、大田原をその中心地と呼ぶことにする。

同じ手法で那須野盆地とその近隣に9個の個別商圈と中心地を抽出できる。大田原・黒磯・西那須野・黒羽・大原間・高林・関谷・野崎・佐久山がそれである(図1)。ちなみに個別圏には全体として、上記の規定をみたまない6個の集落が含まれるが、いずれも領域の細分化を避けるための処置である。

9個の個別圏は1組の隣接地域系を構成する。それが那須商圈系である。系の主部を占めるのは那須野盆地の全域で、これに加えて那須火山麓・八溝山地・喜連川丘陵のいずれもその一部を含んでいる。図1の境界線は適宜に引いたが、河川の流路や山稜線を利用した場合もある。

上述の個別圏に関する規定から明らかなように、例えば中心地大田原の場合、大田原圏の集落に対する結合度は、同じ集落に対する西那須野の結合度より大きい。西那須野圏の集落に対しては西那須野の結合度に及ばない。同様の関係はすべての個別圏の間に成立する。

個別圏は集落の数に著しい差異がある(表3)。ただし商圈としてその大きさを比較するためには、圏内に居住し圏内の供給地に依存する消費者の多少が問題となるから、人口に格差のある集落の数は指標として不適切である。ここでは次善の手段

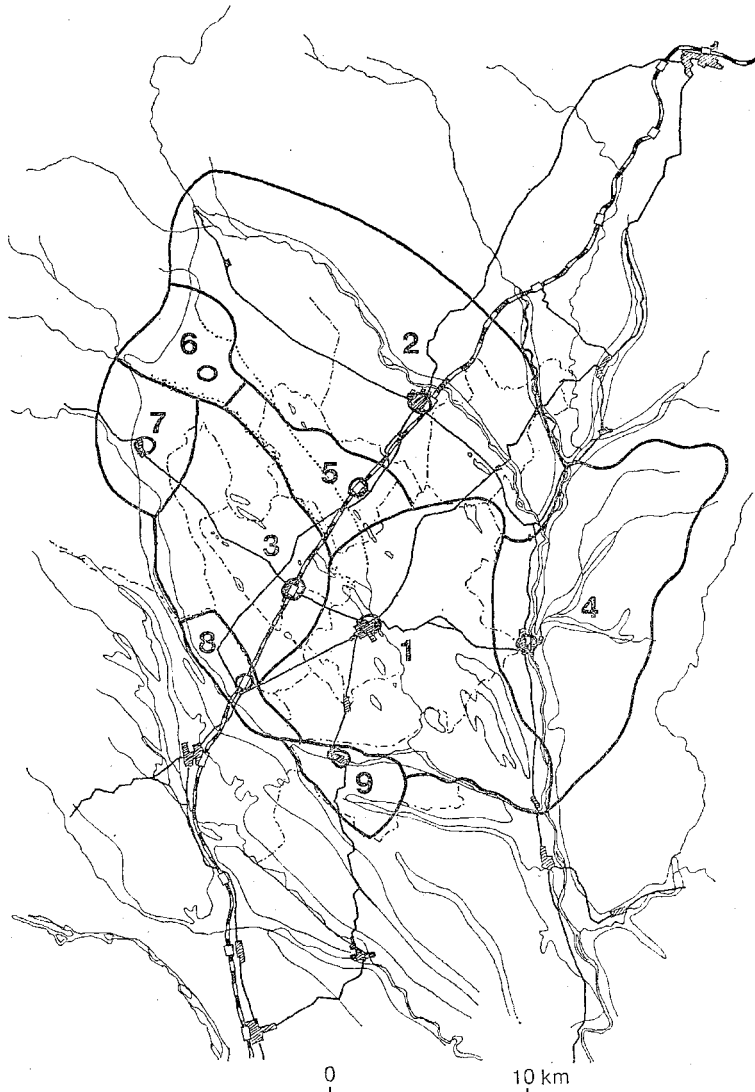


図1 那須商圏系 ○中心地
 (1大田原 2黒磯 3西那須野 4黒羽 5大原間 6高林 7関谷 8野崎 9佐久山)

として、1970年国勢調査の調査区別統計による人口を併記した(表3)。

人口からみると大田原・黒磯・西那須野・黒羽と高林・関谷・野崎・佐久山の2つのグループを対置できる。大原間は両者の中間にあるが、本論では前者に加えて、5個の基幹圏と4個の局地圏を区別した。基幹圏は全体として商圏系の総人口の91%を占めている。大田原と黒磯の両圏だけで60%に近い。

表3 個別商圏

| 商圏名 | 集落数 | 人口(千人) | 圏内結合率(A) | 中心率(B) | B/A |
|------|-----|--------|----------|--------|-----|
| 大田原 | 47 | 40.0 | 89% | 69% | 78% |
| 黒磯 | 31 | 35.8 | 83 | 68 | 82 |
| 西那須野 | 27 | 20.8 | 74 | 65 | 88 |
| 黒羽 | 17 | 15.0 | 70 | 54 | 77 |
| 大原間 | 14 | 7.1 | 61 | 57 | 95 |
| 高林 | 6 | 2.1 | 62 | 52 | 85 |
| 関谷 | 5 | 2.6 | 45 | 39 | 88 |
| 野崎 | 3 | 3.9 | 45 | 36 | 80 |
| 佐久山 | 5 | 2.9 | 62 | 62 | 100 |
| 計 | 155 | 130.2 | | | |

3. 圏内購入(供給)

那須商圏系は商品の供給地と集落との結合度を指標とし、個別商圏を仲介として設定した結節地域系である。本論では個別圏を単元として、圏内供給と圏外供給の2つの面から商圏系を分析した。

表2の宇田川は大田原圏に属するが、これに対して大田原と宇田川自身は同じ圏内の、西那須野と佐久山は圏外(系内)の、東京と宇都宮は系外の供給地で、この順に結合度は26.7, 0.7, 0.6となる。同じ手法を大田原圏の全集落に適用し、圏内・圏外(系内)・系外のすべての供給地の結合度を合わせた結果が大田原圏の総結合度で、その内圏内結合度の占める比率が圏内結合率である。

圏内結合率は45~89%の間であって、大原間を別にすれば基幹圏は局地圏より高い(表3)。中でも結合率を80%越える大田原と黒磯は、多種の商品を圏内で購入する機会が多く、自足性の高い商圏である。これに対して関谷と野崎は圏外依存型といえる。

個別圏の中心地に対する圏内集落の結合度の合計が中心度で、総結合度の中で占める比率が中心率である。中心率は36~69%で、個別圏によりかなりの差があるが、例外なく圏内結合率の圧倒的部分を占めている(表3)。圏内供給を支配するのは中心地に他ならない。9個の中心地の結合度を合わせると、商圏系の総結合度の83%に達する。

個別圏には中心地以外にいくつかの副次供給地がある。本調査では系内合わせて97を抽出した。表3の圏内結合率と中心率の差が、それぞれの個別圏の副次供給地の結合率の総和で、1供給地当りの結合率は中心率に比べて桁違いに小さい。

中心地と集落との距離は大田原・黒磯・黒羽圏で平均4.5~5.5km、その他の諸圏で2.0~3.5kmである。これに対し副次は商圏系の平均値にして、集落との距離1.5kmの近隣供給地に止まる。ただし、いずれも5万分の1の地形図上で測った直線距離で、きわめて概数である。

4. 圏外購入(供給)

商圏系のすべての集落を購入地別に分類し、相

表4 集落の購入地別相対度数

| 圏 の み | 圏 内 の 外 | | |
|-------------|---------|-------|-----|
| | 系 内 | 系内と系外 | 系 外 |
| 3.9 | 36.1 | 55.5 | 4.5 |

表5 圏外供給

| 供 給 地 | 商 圏 数 | 集 落 数 |
|---------|-------|-------|
| 大 田 原 | 8 | 87 |
| 黒 磯 | 6 | 29 |
| 西 那 須 野 | 8 | 90 |
| 黒 羽 | 3 | 10 |
| 大 原 間 | 4 | 16 |
| 高 林 | 4 | 12 |
| 関 谷 | 3 | 7 |
| 野 崎 | 2 | 7 |
| 佐 久 山 | 1 | 7 |
| 東 京 | 6 | 18 |
| 宇 都 宮 | 9 | 76 |
| 矢 板 | 5 | 16 |

対度数の分布を示したのが表4である。殆んどすべての集落は所属する個別圏に加えて、圏外からも商品を購入している。圏外購入は普遍的現象である。中でも圏内の外に系内または系内と系外から購入する場合は最も多く、両者で全集落の90%を上回る。

ただし副次の場合、圏外からの購入は例外的で、その商圏は原則として所属する個別圏の内部に限られている。圏外供給は中心地に独自の機能である。

表5には中心地並びに系外の主要供給地について、供給機能が及ぶ個別圏の数と集落の数を示してある。大田原と西那須野はすべての個別圏を含み、集落数も圧倒的に多い。黒羽と大原間は4個の局地中心とともに、商圏数と集落数のいずれもはるかに劣っている。以上2つのグループの中間に位置するのが黒磯である。

系外供給地の主なものは東京・宇都宮・矢板で、中でも宇都宮の機能は他を圧して大きい。個別圏と集落の数からみて、大田原と西那須野に匹敵する(表5)。

圏外購入は普遍的であるが、商圏系の総結合度

の中で圏外結合度の占める比率は、系内20.3%、系外3.2%で、圏内結合率の76.5%に比べてはるかに小さい。圏外結合率が2%以上の供給地は、大田原・黒磯・西那須野・宇都宮で(表6)、合わせて圏外結合率全体のほぼ80%を占め、上記の商圈数・集落数とともに、この点でも圏外供給を支配している。

大田原は西那須野・宇都宮と商圈数・集落数は似ているが、結合率ははるかに高い。圏外結合度1.4を境として集落の度数分布をみると、大田原の場合には大部分が1.4以上であるが、西那須野と宇都宮では1.4未満が多い(表6)。

表6 圏外供給

| 供給地 | 結合率 | 結合度別集落数 | |
|------|------|---------|------|
| | | ~1.4 | 1.4~ |
| 大田原 | 10.4 | 9 | 78 |
| 黒磯 | 2.4 | 9 | 20 |
| 西那須野 | 3.6 | 63 | 27 |
| 宇都宮 | 2.0 | 56 | 20 |

結合率：商圈系の総結合度に対する圏外結合度の比率(%) 集落数の合計は表5と同じ

5. 個別圏の結合関係、商圈系の結節構造

大田原圏の宇田川は西那須野から乗用車を、西那須野圏の東畑中は大田原から衣類を購入するというように、両圏は商品を介して結ばれている。一般に個別圏A、Bの間には、商品の動きからみて、A→BとB→Aの結合関係が成立する。商圈系の結合構造を形作るのは、9個の個別圏相互の間に認められる72の結合関係である。

商圈系の結合構造を分析するために、個別圏の結合の強度を測る目安として結合率を計算した。たとえば西那須野圏への供給地としての大田原圏

の場合、前者に対する圏内及び圏外の全供給地の総結合度の中で、大田原圏の結合度の占める比率がそれである。

この手法にしたがえば、大田原圏→西那須野圏は結合率20%、西那須野圏→大田原圏は3.6%となる。西那須野圏に対する供給地としての大田原圏は、その逆の關係に比べてはるかに比重が大である。

個別圏の結合率は5%未満の場合が全体の85%を占めている。商圈系の結合構造を簡明に示すために、結合率10%以上の関係を抽出したのが表7である。4節で述べたように副次の圏外供給は例外的であるから、これらの数値は中心地の結合率とみなしてよい。たとえば大田原圏→西那須野圏の20%は、ほとんどすべて中心地大田原に対する結合率に他ならない。この表から商圈系は大田原・黒磯・西那須野を主たる結節点とする結節構造を有することは明らかである。

結合率を10~20%と20~35%の階級に分けて、表7の結合構造を模式図の形に示したのが図2である。大田原と黒磯の両圏は圏外のどの中心地からも結合率10%以上の供給を受けない。事実、結合率はすべて5%未満に止まる。その点では両圏はいわば独立圏といってよい。これに対して両圏以外の個別圏は大田原または黒磯から、そして中でも大原間は両中心地のいずれからも、10%以上の供給を受けている。大原間の圏内結合率が基幹圏の最下位にあるのはそのためである(3節)。

以上の結合関係からみて、大田原または黒磯をそれぞれの結節点とする2つの結節地域を抽出することができる。大田原グループと黒磯グループがそれである。両グループは共通の大原間圏を仲介として、1個の那須商圈系に結び合わされる。

大田原グループを構成するのは大田原圏の外、西那須野・黒羽・大原間・関谷・野崎・佐久山の

表7 A圏(供給地)に対するB圏の結合率(%)

| A \ B | 西那須野 | 黒羽 | 大原間 | 高林 | 関谷 | 野崎 | 佐久山 |
|-------|------|----|-----|----|----|----|-----|
| 大田原 | 20 | 24 | 18 | | 14 | 26 | 33 |
| 黒磯 | | | 12 | 25 | | | |
| 西那須野 | | | | | 29 | 10 | |

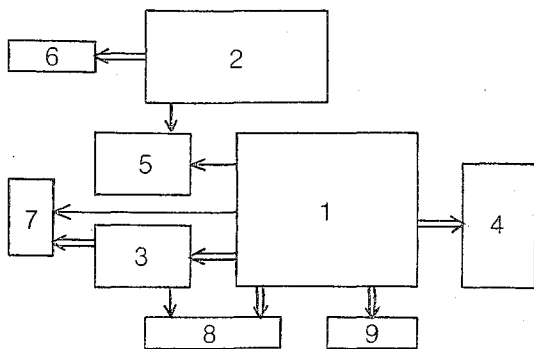


図2 個別商圏の結合関係
結合率、矢印1本10~20%、矢印2本20~35%、商圏の番号は図1と同じ

合わせて7圏で、グループ内のすべての集落に共通の結節点が大田原である。関谷と野崎の両圏は西那須野との結合率も大きいので、それにより圏外依存の傾向を高めている(3節)。

黒磯グループは黒磯圏の外、大原間と高林の両圏から成る。黒磯は3圏のほとんどすべての集落に共通の結節点である。

6. 大田原リング — 那須商圏系との対応

大田原の結合率には個別圏により著しい差異がある。大田原圏では69%、大田原グループのその他の諸圏では14~33%程度であるが(表3、表7)、グループ外の黒磯圏と高林圏の場合、いずれも5%を割っている。大田原圏を核心部分と考えれば、自余の諸圏は縁辺部分に相当する。ちなみに両者を分けるのが、大田原圏の境界線に他ならない。

表題にいう大田原リングとは、個別圏の枠を除外し、もっぱら個々の集落と大田原との結合率に表8 大田原リング、結合率の階級とR1~R5

| 階級 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 平均 |
|-----|-----|-----------|-----------|-----------|------------|-----|
| 結合率 | ~15 | 15 ~40 | 40 ~70 | 70 ~85 | 85 ~100 | 結合率 |
| R1 | | | | 1 | 7 | 92 |
| R2 | | | 1 | 15 | 1 | 78 |
| R3 | | 1 | 20 | | | 56 |
| R4 | 5 | 50 | 2 | | | 24 |
| R5 | 33 | 8 | | | | 10 |

R1~R5に所属する集落の階級別度数を示す

基づいて設定した結節地域で、如上の核心と縁辺の対立を部分的に修正した結果である。

ここでは大田原の結合率を表8の5階級に分け、各階級の集落の分布領域にしたがって、R1~R5の部分地域を設定した(図3)。もっとも領域の細分化を避けるため、隣接階級に属する少数の集落の編入を行った。たとえばR1に取り入れた70~85%のI集落がそれである。なお0%は域外(R6)であるから階級5から除外した。

以上の手法で設定したのが大田原リングであるが、図3から明らかなように、R1, R2, ……、R5の中で、番号の小さい部分は例外なく大きい部分の内側にある。全域は大田原を結節点として、結合率が外に向って低下する圏状構造をもっている(表8)。ここにR1, R2, ……はリング1, リング2, ……の意味である。

大田原リングには、那須商圏系外の隣接集落の内、大田原から供給を受ける場合も取り入れた。全域の集落数は144で、商圏系の155に及ばない。主な理由は黒磯圏の大部分が域外に属するため、それについては後に述べる。

図1と図3との比較から明らかなように、R3を限界する結合率40%の等充線は、大田原圏、したがって核心部分の境界線とほぼ一致する。この線を境として全域は、核心部分に相当する内輪と、縁辺部分の外輪に分けられる。内輪のすべての集落では大田原の結合率が最も高いが、外輪ではその他の中心地が大田原を上回る。2節で述べた個別圏の性質である。

内輪は3個の部分に細分した。階級3の幅が広いのは、地域的に混在する40~55%と55~70%の集落をまとめたため、その結果R2からR3へ大田原の平均結合率が急減する(表8)。

外輪には西那須野・黒羽・大原間・関谷・野崎・佐久山圏のすべての集落が含まれる。内外両輪を合わせると大田原グループの全域を包含する。グループはリングの集落の82%を占め、その中核をなしている。

外輪は大田原の結合率15%を境としてR4とR5に分けられる(表8)。R4に属する集落は西那須野・黒羽圏の大部分と、野崎・佐久山圏のすべて



図3 大田原リング
数字はリングの番号 ●R32, R42の集落

表9 個別商圏と大田原リング

| 個別商圏 | 大田原 リング | R1~R3 | R4 | R5 |
|------|------------|-------|----|----|
| 大田原 | 47 | 46 | 1 | |
| 黒磯 | 7 | | | 7 |
| 西那須野 | 27 | | 25 | 2 |
| 黒羽 | 17 | | 15 | 2 |
| 大原 | 14 | | 3 | 11 |
| 高林 | 4 | | | 4 |
| 関谷 | 5 | | 1 | 4 |
| 野崎 | 3 | | 3 | |
| 佐久山 | 5 | | 5 | |

個別商圏の集落の内、大田原リングへ所属する数

で、これに対して大原間・関谷圏では大方がR5に属している(表9)。図2に示した諸圏の中で、大田原圏との結合率20~35%のI圏はR4に、10~20%はR5に照応する。なお高林圏は一部を除きR5に含まれるが、黒磯圏の圧倒的部分は既に域外にある。

7. 大田原リング — 平均結合率の推移

表8には大田原のリング別平均結合率を示してある。平均値はR1の92%からR5の10%まで、中心

表10 R3とR4の接触地帯，結合率の度数分布

| | | | |
|----|---------|------------|----|
| R3 | 外輪の結合率 | 0~10 10~45 | |
| | 接触地帯 | 7 | 10 |
| | 接触地帯外 | 3 | 1 |
| R4 | 大田原の結合率 | ~30 30~50 | |
| | 接触地帯 | 9 | 10 |
| | 接触地帯外 | 36 | 2 |

地大田原から外側へ向って単調に減少している。それに代って同じ方向に増大するのが，大田原以外の供給地の結合率である。

表8の階級は幅が同じでないから，平均結合率もその影響を免れない。R3とR4の間には30%を越す差異がみられるのもそのためである。この点を補正して，大田原の結合率のリング間推移を可及的に均一化し，その上で他の供給地について考察を進めたい。

この目的で抽出したのがR3とR4の接触部分の集落である。両リングの境界線に沿って，それぞれの側に幅1.5kmの地帯を設けると，R3では外輪の供給地の結合率10%以上の集落が，R4では大田原の結合率30%以上の集落が，いずれもこの地帯に集中的に含まれる(表10)。これらの集落をそれぞれR32とR42に一括し，R3とR4のその他の部分をR31とR41で表わした。R1, R2, R31, R32が内輪，R42, R41, R51が外輪に相当する。

大田原以外のすべての供給地は，内輪副次・外輪中心地・外輪副次・リング外の4群にまとめた。供給地をリング別に，10%以上の平均結合率を示したのが表11で，それだけでリング毎の合計がいずれも90%を越えている。なお残りの欄はすべて

表11 大田原リング，供給地別，リング別平均結合率

| 供給地 | リング | | | | | | | |
|------|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|--|
| | R1 | R2 | R31 | R32 | R42 | R41 | R5 | |
| 大田原 | 92 | 78 | 62 | 50 | 37 | 22 | 10 | |
| 内輪副次 | | 17 | 31 | 21 | | | | |
| 外輪中心 | | | | 22 | 59 | 61 | 59 | |
| 外輪副次 | | | | | | 13 | 10 | |
| リング外 | | | | | | | 21 | |
| 集落数 | 8 | 17 | 11 | 10 | 10 | 47 | 41 | |

10%以上のみ，残りはすべて5%未満

5%未満である。

この表からみられるように，大田原の結合率はR1からR5へ，単調かつ概して一様に低下している。内輪では大田原が常に1位を占めるが，それについては既に6節で指摘した。全域を通じて結合率が10%を上回るのは大田原だけで，その他の供給地群はリングによっては5%に充たない。

R1では大田原が，R2とR31では大田原と内輪副次の合計が，結合率の圧倒的部分を占めている。内輪副次の結合率はR2で俄かに増し，R31で極大値に達する。外輪中心の結合率が急増するのはR32である。

外輪で1位を占めるのは，もっぱらこの地の中心地群で，R42とR41では大田原が，R5ではリング外供給地が2位にある。リング外供給地の結合率が高いのはR5に限られる。外輪副次の結合率はR41で最も大きい，内輪副次の極大値と比べてはるかに劣っている。

内外両輪の境界線をはさんで，(1)結合率1位の供給地が大田原と外輪中心の間で交替する。(2)内輪副次の供給は外輪で俄かに断絶する。(3)外輪中心の供給は内輪で急減するが，R32では内輪副次と同程度の結合率を保持している。これに反してR31にはほとんど及ばない。既述のように(1)と(2)は個別圏の境界で生起する現象で，(3)は上記の接触地帯の特徴である。

8. 大田原リング - 商品群の推移

同一の供給地(群)に対して，R1からR5まで，結合率の推移の状態が余り違わないいくつかの商品を，10個の群にまとめた結果が，表12のA~J

表12 商品群

| 商品群 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J |
|------|-----|-----|-------|----|-------|-------|-------|----|-------|----|
| 商品番号 | 1~6 | 7~9 | 10~11 | 12 | 13~15 | 16~20 | 21~23 | 24 | 25~27 | 28 |

番号は表1と同じ

表13 大田原リング，商品群の供給地別，リング別平均結合率

| 結合率 | 供給地 | R1 | R2 | R31 | R32 | R42 | R41 | R5 |
|--------|--------------|-----|------|-----|------|---------|------|-----------|
| 54~100 | 大田原 | A~I | A~H | A~F | A~D | A, B, E | A | |
| | 内輪副次 外輪中心 | | I | G~I | H, I | | B~I | B~I |
| 24~46 | 大田原 | | I | G | E~G | C | B, C | A |
| | 内輪副次 | | G, H | F | E~G | | | |
| | 外輪中心 | | | | E~I | B, E | A | A |
| | 外輪副次 リング外 | | | | | | G, I | I A, E |

の系列である。本節では各群に属する商品のリング毎の平均結合率を準拠として、表題のあらましを述べたい。以下結合率というのはこの意味の平均結合率である。

表13ではJを除くすべての商品群を、結合率にしたがって、(1)54~100%と、(2)24~46%の2つのグループに分けて示してある。それ以外はすべて24%未満で、両グループの中間値は存在しない。R32のE~GとR5のAを除けば、A~Iは例外なく、内輪では大田原または内輪副次の、外輪では大田原または外輪中心地の、(1)に属する商品群として、その点では当該供給地の準独占ないし独占商品である。

大田原についていえば、R1ではA~Iのすべてが(1)に所属し、結合率は各群とも80%を越えている。R1は大田原の近隣商圏に他ならない。R2ではA~H、R31ではA~F、...というように、R42のEを除くと、アルファベットの順を逆に、

1~2群ずつ数を減じ、R5では(1)は全くみられない。ちなみに(2)の一群は、R2のI、R31のGのように、結合率の低下に伴って(1)から転じた商品群で、R5ではAがそれである。

R2~R32では、A~Iの末尾にあるグループ(1)の商品群が、大田原から内輪副次の手に移る。中でもR31ではG~Iの3群が該当する。

既述(7節)のように、外輪中心の商圏はR32に及んでいるが、この場合商品群はもっぱら結合率(2)のE~Iである。その内上記のE~Gに関しては、大田原と内輪副次も同じ程度の結合率をもつ供給地に数えられる。

内輪副次はR42で(1)と(2)の商品群のすべてを失い、その商圏は断絶する。外輪中心は同じリングで俄かに機能を増大し、ここで初めてC、D及びF~Iが、続いてR41とR5ではB~Iのすべてが(1)の商品群となる。AはR41では大田原に残された唯一の(1)であるが、R5では大田原と外輪中

表14 大田原リング，乗用車(J)の供給地別，リング別結合率

| 供給地 | リング | R1 | R2 | R31 | R32 | R42 | R41 | R5 |
|-----------------------------|------|----|----|-----|-----|-----|-----|----|
| 大田原 内輪副次 外輪中心 リング外 | 大田原 | 51 | 44 | 46 | 22 | 24 | 14 | |
| | 内輪副次 | | | 10 | | | | |
| | 外輪中心 | 36 | 38 | 39 | 68 | 56 | 59 | 54 |
| リング外 | | | 19 | | 10 | 20 | 25 | 39 |

10%以上のみ、外輪副次はすべて10%未満

心の外、リング外からの商品で、結合率はいずれも(2)に止まる。ちなみに外輪副次の商品群はもっぱら(2)のGとIに限られる。

リングの全域を大田原と結ぶのは他ならぬAである。その中でも「たんす類」はR5で結合率46%を維持し、他の商品と比べて最も高い。

乗用車(J)はA~Iと比べて、結合率の推移の形態を異にする(表14)。(1)どのリングでも独占的供給地はない。(2)リング外供給地の結合率も比較的高い。(3)外輪中心の結合率はR1~R31で

も大田原と大差がなく、R32では既に大田原よりはるかに高い。(4)全域を結ぶのは外輪中心である。

注

- 1) 1979年1月20日、お茶の水地理談話会で発表。本稿はその要約である。
- 2) 松井勇(1973): 那須野盆地の小売商圏, お茶の水女子大学人文科学紀要, Vol.26, No.2 1~35.

(本学名誉教授)

The Regional System of Retail Trade Areas in the Nasuno-Basin
—the Nasu-System and the Otawara-Ring
Isamu MATSUI